

「内部統制の限界」を超えるコーポレート・ガバナンス論～日本における粉飾行為に対する心理学的考察～

著者	山本 剛
発行年	2013-09
その他のタイトル	A study on corporate governance that exceeds “Limitations of Internal Control” - A psychological consideration to the balance-sheet manipulation in japan -
学位授与機関	高知工科大学
学位授与番号	26402甲第243号
URL	http://hdl.handle.net/10173/1063

氏名(本籍)	山本 剛(大阪府)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第243号
学位授与年月日	平成25年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
研究科・専攻名	工学研究科・基盤工学専攻
学位論文題目	「内部統制の限界」を超えるコーポレート・ガバナンス論 ～日本における粉飾行為に対する心理学的考察～ A study on corporate governance that exceeds "Limitations of Internal Control" - A psychological consideration to the balance-sheet manipulation in japan -

論文審査	(主査) 高知工科大学 教授 那須 清吾 高知工科大学 教授 村瀬 儀祐 高知工科大学 教授 渡邊 法美 高知工科大学 教授 末包 厚喜 高知工科大学 准教授 坂本 泰祥
------	---

審査結果の要旨

1.論文の評価

企業における内部統制は、会計システムやその罰則等により効果が高いと評価出来るが、経営者が不当な目的の為に内部統制を無視ないし無効ならしめることもあることから、不祥事がかなり発生しているのが現状である。日本の場合、粉飾は横領のような直接的なインセンティブがなく、やむにやまれぬ理由として正当化される場合が多い。従って、欧米の研究成果からは社会が採るべき具体的な施策が提唱出来ない。

この「内部統制の限界」を超えるコーポレート・ガバナンスの仕組みを構築することは可能なのかという質問に答える為には、不祥事の発生メカニズムを当事者の心理的構造から実際の行動に至るモデル化を実施し、そのモデルに基づいて仕組みを考え検証する必要がある。

本研究では、経営者へのプレインタビューから合理的行為理論と計画的行動理論の統合モデルにより、粉飾を実行に移すまでの心理学的モデルを構築した。また、これを検証するとともに、心理学的モデルから更に具体的な粉飾心理ロジックモデルを得る為に、30人の民間経営者あるは社員を対象に、具体的な粉飾を実施したくなる場面を設定し、インタビュー形式により行動シミュレーションをして頂いた。また、その結果をインタビューすることで、仮説としての粉飾の合理的行為理論と計画的行動理論の統合モデルを検証するとともに、30人のインタビュー結果からより絞り込んだ粉飾心理ロジックモデルから、粉飾防止の為に抑制すべき要素を特定し、例えば「内部通報制度」などの効果的な対策が選定出来ることを示した。

本研究の更に大きな意義は、合理的行為理論と計画的行動理論の統合モデルにより粉飾心理をモデル化し、しかも、今回の30人のシミュレーション結果から、全てのケースについて分析できる論理的枠組みであることを確認したことである。今後の粉飾研究におけるツールを提供出来た意義は大きく、今後、他の粉飾場面設定でより多くのシミュレーション研究を実施することでこの分野が発展することが期待される。

2.審査の経過と結果

- (1) 平成25年7月10日 博士後期課程委員会で学位論文の受理を決定し、5名がその審査委員として指名された。
- (2) 平成25年8月23日 公開論文審査発表会及び最終試験を実施した。
- (3) 平成25年9月 4日 博士後期課程委員会で学位授与を可とし、教育研究審議会で承認された。

o